
詩と死と使徒

蔵本 新戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩と死と使徒

【Nコード】

N52260

【作者名】

蔵本 新戸

【あらすじ】

世界政府は魔法の存在を発表し、魔導師が現在の人類共通の敵であると表明する。これに対し魔導師側は反抗。人類全土を巻き込んだ戦争へと発展していく。

始まりの児（前書き）

処女作品です。

稚拙な文章ですが、お付き合い頂けたら幸いです。

始まりの児

魔法科学という言葉が定着したのも、ここ最近の話である。

古代文明が魔法社会を築いていたとか、ある部族には魔法の力が今に残っているとか、あいつは魔法使いだとか、そんな話はいつの時代にも溢れていたが、証拠や証明があいまいなものでしかなく、国家レベル及び政府レベルで魔法の存在が肯定される事はなかった。それが、ここまで早期に魔法の存在が広まり、信じられたのも、世界合同政府の、緊急事態宣言（魔道肯定宣言ともいわれる）によるものが大きいだろう。

魔法の存在が確認されてから、ここまで迅速に世界合同政府が動いたのは、人類の敵が、魔道師であり、協力して事に当たることが必要で、戦争はやむを得ない手段なのだというアピールをしたかったのだろう。

全世界レベルで軍隊を動かすという事を批判なしで出来るようにするには、人類共通の敵であるという事実と、魔法という得体のしれない力が背景に必要なだったのだ。

これにより、世界合同政府加盟国は、非加盟国に対しても戦力を送り込むことに成功する。厳戒態勢を敷き、非加盟国にも、魔道師にもプレッシャーを与えた。

しかし安易な権力争いなどこれから起こる様々な事象で崩れ去っていくことを魔道師たちは予期していた。

ヨシユアは、物音一つ立てずに壇上に上がった。

「初めまして。全世界の皆様。私は「始まりの児」ヨシユアと申します。以後お見知りおきを。」

そこでヨシユアは深々と頭を下げた。

砂漠の旅人を思わせる格好だった。白い帽子、白いマント、顔も目以外は白い布で覆われている。眼光は鋭いが、女性的な雰囲気

感じさせる声だった。

「まず、この戦いにおいて、犠牲になった人々に祈りを捧げたいと思います。」

ヨシユアは目を閉じて、右手を前に出した。

右手が光り、ヨシユアは閉じた目を開き、右手をそのまま空にかざした。

「冥界だとて、はかなく散るは同じこと。忘却の花とは言えまいが、せめて安らかに眠りたまへ。」詩を朗読するように、唱えると

無数の桜の花弁が空から降り注いだ。

それは悲しみがこびりついてしまった街の至る所に降り注いだようだった。

茫然と構える老女。

行くあてのない少女。

笑顔の消えた少年。

彼らの上空にも花弁が降り注いだ。

悲しみは拭えるとは思えなかったが

少しの慰みになったようだ。

事実、この会見の後、始まりの児を支持する国民が50%を超えた。

始まりの児は会見の半年後には王になったのだ。

権力を手にしたヨシユアが、まず行ったことは鎖国であった。ヨシユアが権力を握った世界政府非加盟国である「イグアイン」は島国であり、人口は200万程の小さな国である。資源は豊富だが、部族間種族間の争いが起こっており常に内戦状態であったが為に、世界政府に介入されている状態であったが、ヨシユアが指導者となつてからは内戦は収まり、まとまりをみせていた。世界政府の軍隊は警戒を強め戦力を送り込もうとしたが、結界がはられ上陸ができ

なかった。イグナイン国内の世界政府軍隊も制圧され、手も足も出ない状態である。島の外周を包囲することしかできない状況が続いており、中がどうなっているのかは謎に包まれていた。

こちらからのアクセスは完全に遮断されているにも関わらず、イグアイン側の魔導師たちは、神出鬼没にあらわれてテロ活動を開始した。各国政府要人は「アサシン」と呼ばれる魔導師達に恐怖した。巨大な軍事力を持つている要人たちは暗殺を恐れた。

100にも満たないイグアイン側の魔導師たちに世界は恐怖し、時代に変革の時が来たのを告げていた。

世界の緊張状態は続いた。

ルータは頭を掻きながら言った。

「また護衛の依頼？」

「そうだ。まあ最近は何事だからな。」

「また依頼者の情報は教えてもらえないんだろ？」

「察しがいいな。」ノエルは答えた。

ノエルは白髪で長髪、長身で痩せている。切れ長の一重の目。上下黒のスーツに黒のシャツ、どこからどう見ても殺し屋にしか見えない風貌をしていた。

「まあお金がもらえるなら何でもいいよ。」

「今回の報酬は結構なものだ。よほどのお偉いさんが絡んでいるんじゃないか？」

「まあ興味ないね。」

「期日までは、少しある。まあ自由に過ごしてくれ。」

「了解。」

ルータは依頼者にも、世界にも興味がない。自身の持つ能力を有効に使い、金を儲けられればそれでいいと思っていた。金を貯めて何をしたいわけでもないのだが、それでもしないと何もしないから

金を貯めるのだ。いつかきつと役に立つものは世の中に金と力以外になにがあるだろう？そんな風に思っていた。

「遊びにでも出かけたらどうだ？」

「子供じゃないんだから、どう過ごすかは俺が決めるさ。」

「十分に子供だと思うがな。」

ノエルは後ろ手にドアを閉めて出て行った。

ルータとノエルはコンビを組んで1年になる。お互い干渉もしないし、ルータはノエルについてほとんど何も知らなかった。

戦闘能力に優れ、時に魔法の力に似たものを使う。

それが魔法なのかは分からなかったが、詮索もしなかった。ルータにとってどちらでも不都合ではないし、足をひっぱらなければそれでいいのだ。

明日死ぬかもしれない雇われの身。そんな状況は自分にとって過ごしやすく清々しくも思えた。死に場所を探しているとは言わないがそれに似た感情はあるかもしれない。ルータはそう思っていた。

期日の日が来て準備をして、駅に向かった。駅には先にノエルがいた。

「おう。」とこっちに軽い挨拶をしてやってきた列車に乗り込んだ。基本的には全ての依頼の主導権はノエルが握っており、当日までどこで何をするのかを知らないのはいつものことだった。

二人は言葉少なに列車に揺られた。二人の本拠地である街は、世界政府加盟国の主要国家の首都であるがゆえに、人の数も多い。当然交通網も発達しており、この列車の線路は隣国にまで伸びている。雑多な人々が無表情で列車に揺られるのは都会の証拠なのかもしれない。

「どこまで進むんだ？」

「ライフアート駅で降りる。大きな声じゃいえないがな。秘密裏に各国のお偉いさん達が、魔法について意見交換するんだと。」

ライフアート地区はいわゆる政治地区といわれるところで、政府

機関や企業などの集合地域になっている。

「意見交換？」

「まあ実際は各国がどのくらい魔法について研究が進んでるか腹の探り合いをするってことだろうな。」

「ふーん。」

「自然暗殺の可能性は強くなる。まあお偉いさんっていつでも使いっぱしりだろうから、本当の上ではないだろう。中堅の幹部だろうな。」

「今回はそのじじい達の警護任務か。」

「そういうことだ。」

「襲撃予想は？」

「十中八九だな。」窓の外は、雨が降りそうな物憂げな暗さだった。「やれやれ。なら延期すればいいのにさ。」

「延期したところで、襲撃予想は十中八九だ。」

ため息をつきながら、まあいいと思った。命を狙われるというのはそれなりの理由があり、守るのには金が動く。それだけではないか、自分は唯、金のために任務を遂行するだけだ。

明日がなくとも

ライフアート地区はレンガ作りの街並みが広がっていて、政治の印象とは遠く、可愛いらしい色彩が観光名所ともなっている。

実際は警察署や裁判所、大手企業に大使館。少しも可愛らしい要素などない建物ばかりなのだが。

ちょうど中心に建っているこの街で一番高い塔がライフアート礼拝堂と呼ばれる建物で、政治拠点として各国政府の会議場になっている。礼拝堂が政治会議の場に頻繁につかわれるのは、その昔に宗教国家といわれていた頃の名残であり、現在は政教分離となっている。

その昔、暴君ダビドは民衆の手でこの礼拝堂につれてこられ、革命の果てに処刑されたという。

「よく考えれば、ライフアートに来るのは初めてだな。」ルータは言った。

「そうか。観光名所だし観光しとくか？」抑揚のない低い声でノエルは言った。

うつろな瞳で行きかう人々の群れ。

自分も、少し違う運命であれば、ここの人々のように過ぎていく日々埋没した中で、毎日を設計し、壊れぬように願いつつ歩幅を気にしつつ生きていたのだろうか？それはそれで大変だしつまらないようにも思えた。日々の生活において守りたいものはあるのか？きつとみんなあるだろう。俺にだってあるさ。今日限定の護衛任務だ。守りたいものには変わらないだろう？ルータは思った。

ちよつと待つてろ。とノエルは言い残し、礼拝堂に入り、責任者らしい人間と話をしている。

暗い空と陰気な礼拝堂。暗い俺と黒い殺し屋風の男。なかなかミスマッチだし暗殺者がいるとしたらこれ以上ないくらい俺達のことではないか。ルータは少し笑った。

「何ニヤニヤしてるんだ？行くぞ。」

「ああ、ごめんなんでもないさ。」

「俺達の立ち位置は三階の中央階段前だ。」

「どこでもいい。」

「一応言つとくが……。ここに来る予定だった人間がもう二人やられているそうだ。」ノエルは面倒そうに言った。

「それはそれは。御愁傷さま。」

「護衛が5人殺されている。」

「殉職つてやつだね。」悪びれる様子もなくルータは言った。

「職に殉じるか。俺はそんなのごめんだね。」相変わらず抑揚のない声でノエルは言う。

「他の護衛には話しかけるな。撃たれるかもしれん。ピリピリしているからな」

「了解です。」

「俺らの仕事は……。」

分かっているよノエル。魔道師の殲滅だろう？護衛ではないんだ。こんな俺らにはぴったりの仕事だ。

悲しさは空から降り注ぎ、喜びが生まれたとするならば、星の声は悲鳴なのかもしれない。ただ信じることよりも　ただ待つことよりも、

目を見開いて空を見るんだ。

私は宇宙の一部、私は太陽の一部。

感じることは

悲しさからの贈り物。

ああ暗き夜よ。

ああさみしき夜よ。

おい……。おい。

ルータ、ルータ。
ルータ。

「んっ……。ああ」

「大丈夫かお前。完全にいつちゃってたぞ。」ノエルは覗き込みながら言う。

「だい・・じょうぶ。」目をこすりルータは答えた。

「しつかりしてくれよ。そんなだと死ぬぞ。」溜息と同時にノエルは言った。

頭に詩が勝手に浮かぶのは、今に始まったことじゃないのでノエルは別段驚かない。

「こんな状況でロマンチックな事で。」ノエルは言った。

「うるせーな。仕方ないだろうが。」俺だって原因分かんないんだから。ルータは思った。

「多分そろそろパーティー始まるぞ。」

「へえ。感じる？」

「ああ、多分な。」

これまでの、魔道師によるテロには特徴があった。正面からやってくるのだ。友達の家遊びに来るように。

「毎回思っただけどさ。」

「ああ。」

「もつと警備強化しないのか？」

「軍隊一個でも足りないな。」ノエルは言った。

「それなら、なおさら・・。」ルータは言った

「だから使いつぱしりと影武者ばかりじゃないか。」

「そいつらは、死んでもいいと？」

「そういうことだ。」ノエルは投げやりに言った。

「ほら来るぞ。」

ドーンという爆発音。舞い上がる黒煙が、窓から見えた。

「結構派手な魔法をお持ちのお客様らしいな。」ノエルは上着か

ら小型のリボルバー銃を取り出した。

「ああ厄介そうで面倒だ……。やだやだ。」ルータもポケットから銀色の筒状のものを取り出す。

ルータが筒を空中で弄び一回転、二回転させると、レーザー光のような緑色のエネルギーが小刀のようになる。

「相変わらず、かつこ悪い武器だ。」ノエルは笑う。

「結構気に入ってるんだけど。」ルータは言った。

「窓から来たりしないかな？」

「多分ゆつくりと階段でいらっしやるよ。」そういうやつらだ。

ノエルは言った

「要人の逃走経路は？」

「知らねえ。俺らの役目はそんなんじゃないからな。」

「さて今日は生きてられるかな。」

「さあな。」ノエルは笑う。

ルータ達が魔道師と戦うのは初めてではない。生きているのが不思議なのだが、ルータ達は魔道師に勝ったことがない。死んでない分だけ、普通の人間よりも魔道師に通用しているという事ではあるのだが。

「遺言状は書いてきたか？」

「俺に知り合いはいない。」

「地獄に金は持ってけないぞ。」ノエルは言った。

「地獄の沙汰も金次第つてな。」

下の階から

たくさんの銃声。

悲鳴、悲鳴

護衛諸君は次から次にやられているようだ。

数々のドラマが生まれ

今日また沢山の人々のドラマが終わっていく。

殺人であれ

寿命であれ

死後

誰かが思いを巡らすなら素敵なことだ。

そんなことをルータは考えていた。

「初めましてかな。傭兵君達。」

気がつくのと階段の踊り場から魔道師が声を発した。

ジプシーのようなターバンをしている。全身赤でコーディネートしてこれ以上ないくらい目立つ格好だ。登ってきたというより突然現れたという雰囲気だった。

「ずいぶんとおしゃれセンスがあたりだな。魔道師ってのは。」ノエルは言った。

「前に戦った魔道師は緑色だったっけ。」ルータは言った。

「恥ずかしがりなのか、目立ちたがりなのか。わからんな。」ノエルは相手を見据えて銃を構えた。

「名前教えてもらっていい？」ルータは言った。

紅蓮の魔術師とも呼んでくれればいい。魔道師は笑みを浮かべながら言った。

「じゃあ最後に一つだけ。」

「赤い格好で紅蓮の魔術師、もしかしたら、火を使う魔法が得意だったりするんだろう？」

だったら？紅蓮の魔術師は言う。

「ひねりもねえし。」ノエルは言った。

「ベタだし。」ルータは言った。

「センスわりーよ。もつと期待を裏切ってくれないと。」ノエルは言った。

ノエルは薄笑いでルータを一瞬見た
ルータはうなずいた。

くたばりやがれ、同時に二人は言った。

ノエルのリボルバー拳銃が火を吹き
ルータは一気に間合いを詰めるため突進した。

刹那、紅蓮の魔術師は笑った。

紅蓮

ルータは笑った。
いやいや……。

もうちょっとかなるんじゃないかと思っていたが、
無理だな。

激痛が走り、顔が歪んだ。

ノエルは生きているかな。こっちからじゃよく見えないや。

「放たれた火は破壊。放たれる日も破壊。右手をかざす我に、力と少しの慈悲を……。この手で燃やすだけ、魂を燃やすだけ。」
紅蓮の魔術師が詩を唱えると、右手に炎がともっている。

「あのさ。聞きたいことあるんだけどさ。」ルータは薄笑いで言う。
う。

「なんだ？」紅蓮の魔術師が答える。

「あんたたち魔術師はみんなそうなのか？」

「なにがだ？」

「魔法唱える時に、なんか言っているだろ。詩みたいなのやっ。」

「ああ。」右手の炎は勢いよく燃えている。

「その詩は必要なものなのか？」

「ああ。必要だ。言霊は扉を開くカギだからな。」

へえ。そうなのか。じゃあ俺の頭に浮かぶ詩も、何かの魔法の詩になったりするのかな？

さあな。詩があれば誰にでも使えるというものではない
そうだろうな。

もう……。いいか？

駄目だと言っても待ってはくれないだろう？

……。

さらばだ。弱きものよ。
紅蓮の魔術師が右手を上空にかざす。
これで・・・終わるか。

「さらばってそれはお前だよ。」

一瞬のうちに紅蓮の魔術師の背後に黒い死神が立っていた
満身創痍で血まみれ、立っているのもやっとなはずなのに、ノエ
ルの周りの空気はとても凍てついた空気が停滞し、静かで美しい印
象を与えた。

銃弾が紅蓮の魔術師に突き刺さる。

一発。

二発

三発。

キサマ・・・なぜ。

「俺は普通ではないんでね。」

確かに致命傷を与えたはず。

「確かに死んでるかもな。」

まさか。

「あんまり詳しくは教えたくないね。」

お前らは一体・・・。

ぐつ。不覚だった。こんな銃弾ごときで。

「おい。ルータ無事か？」

「全然無事ではないね。」

「そうか。無事と解釈するわ。返事あるからな。立てるか？」

「立つしか・・・ないだろうが。」

「そういうことだ。立ちなさい。」抑揚のない低い声だ。

「ところで・・・。」

「説明は後だ。俺の銃弾は特別製だが、魔術師は銃弾ごときじゃあ死なない。そこそこ効いてるみたいだな。気を抜くな。剣構えとけ。」そこまで一息で話すとノエルの身体力が抜けて、膝から崩れ落ちた。

「ぐつ。ルータ悪いが、ここまでだ。退散って感じたな。」

一瞬目の前が白く染まり紅蓮の魔術師も、ルータも目を閉じた。時間にして一秒もなかったが、ノエルの姿は消えていた。

どういうことだ？貴様らは一体？

「あれ？緑色から聞いてないの？普通じゃないんだよ。俺たちはさ。」

「転がっていた緑色のエネルギーが小刀状になっている銀色の筒を拾い上げ戦いの構えをとる。」

「といっても、あんたらのほうが普通ではないんだろうけど。」

ちっ。図に乗るなよ小僧。

私は、この程度で死にはしない。膝をついている紅蓮の魔術師はこちらを睨みつけて言う。

「悪いけど殺す。緑色は殺せなかったが、あんたは緑色より弱い。」私が・・・私がヤツに劣るだと？

許されん。許されんぞ。貴様ら・・・ルータとノエルと言ったな。忘れん・・・この屈辱・・・。

「俺らも勝ち目ゼロだと思っていたし、ノエルがこうなってくれて奇跡的に、優位に立てているんだ。それでもお前は緑色より弱い。」

ノエルがいろいろが、奇跡が起きようが緑色を殺せる気はしなかったからな。あんたは死ぬんだよ。」

死ぬだど？人間に魔術師が殺せると思ってるのか？

「ああ。もう楽になれよ。」ルータは構えた小刀を打ち下ろした。

紅蓮の魔術師は右手で防御姿勢をとる。

紅蓮の魔術師の右手は切られて地面に落ちた。

右手を犠牲にし、身体への直撃を避け、紅蓮の魔術師は距離を取るため後ろに飛ぶ。

「逃がすかあ。」ルータは間合いを一気に詰めて、二撃目をなぎ払う。

瞬間、紅蓮の魔術師は自らの血をルータに浴びせかけた。

目に入り視界を失うルータ。

紅蓮の魔術師は叫ぶ。

ここで終われぬ、ここで終わらぬ。

失いし右手を冥府に捧ぐ。闇よわが右手を所望せよ引き換えに力を・
・。爆炎を・。破壊を。

詩なのか・。願いなのか・。唱え終わると閃光が走った。

バックドラフトのような風と炎。爆発音。

逃げられる・。そう思った時から記憶がとぎれた。

目を覚ますと自分の部屋のベッドに横たわっていた。

「おう。目を覚ましたか。」ノエルはリングを剥いてる途中だったようだ。ウサギ型のリングが皿の上に乗っている。

「あんたその黒のスーツ何着持ってるんだ。」首を上げようとする
と鈍い痛みが全身を走った。

「無理しないほうがいいぞ。結構お前重症だ。」剥き終わったリングを頼張る。

「俺のじゃねえのかよリング。」ルータは言う。

「リングは俺の好物だ。」

ノエルはいつもと変わらぬ様子だ。怪我をしている様子もないし、いつも通り黒のスーツ上下。黒のシャツ。

「あんたは相変わらず不気味な奴だ。」

「お褒め頂いて光栄です。」リング兎は三個目。

「俺はしばらく動けなそうだな。痛みがひどい。」

「まあすぐよくなるさ。全体的にやけどやらなんやらあるがそんなにひどいもんでもないらしい。世界記録更新だよ。やったな。」

「何の世界記録？」ルータは言った。

「ん？わかんねーか？魔術師と殺し合いをして生き残った回数だよ。」

「

前回の記録保持者もお前だけだな。リング兎は四個目。

「それはそれありがたい記録で、これからも更新できるよう頑張ります。」

「その意気だ。」リング兎は五個目。

「てかリング全部一人で食うなら、兎にするとか意味ないだろう。」

「馬鹿だな。短い人生こういうのが素敵でロマンチックだと思わないか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5226o/>

詩と死と使徒

2010年10月29日11時59分発行